

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本看護学会論文集:看護管理(2006.03) 36号:256～258.

看護計画開示の成果報告会の有効性

小山内 美智子, 平 千亜紀, 中澤 紘子

# 看護計画開示の成果報告会の有効性

小山内美智子<sup>1)</sup>・平千亜紀<sup>1)</sup>・中澤紘子<sup>1)</sup>

key word : 看護計画開示, 報告会, モチベーション

## はじめに

A 大学病院 B 病棟では 2000 年 5 月より看護計画協働立案及び開示（以下、看護計画開示）を実践し、2003 年日本看護学会（看護管理）においてその成果を報告した。開示率（対開示可能な患者）も 2004 年度は 46% 145 名実践でき、目標達成できた。しかし患者との面談などの日程・時間調整をし情報収集・アセスメント・評価など看護師の個人差はあるが一回の面談に 20～40 分の時間を要し課題と感じている。一方看護師にとっては患者より直接的に評価を受けたり誠実な対応が認められたりと看護師としての質やモチベーションの向上につながっている。そのため課題の検討をしつつこれを継続していくためのひとつとして、2003 年後半より年 2 回、開示して達成感を感じた症例を報告し互いに認め合う会（以下、開示成果報告会）の実施を開始した。その効果を知ることができたので報告する。

## I. 研究目的

開示成果報告会が看護師のモチベーションの向上にどのような効果があるかを知る

## II. 研究方法

### 1. 期間

2003 年 11 月～2005 年 3 月

### 2. 対象

B 病棟に勤務する在籍 1 年以上の看護師 16～20 名

### 3. 方法

1) 看護計画開示成果報告会の実施（対象者全員が報告するために 2 日間実施）

テーマを設定し一人 5 分パワーポイントを活用して報告する。

参加者は B 病棟看護師及び当該看護師長。ゲスト参加者として 1 回目は看護部長、2 回目以降は他の看護師長の参加を依頼した。

参加者は各報告者に対して報告後は拍手をすること。またその内容やプレゼンテーションなどについて肯定的にコメン

トをすること。これらを理解し参加する。

報告会終了時看護師長より報告会全体についての評価コメントを伝えることとした。

2) 報告終了後独自に作成した報告会参加についてアンケートにて調査

〈内容：1 回目・2 回目〉

①開示報告会の企画（時期・時間・方法）に対して、はい・いいえ・どちらともないの 3 段階とし準備については大丈夫・大変・どちらともないの 3 段階評価とした。②他者から肯定的なコメントを受けた時の気持ちを記述式で回答、③他者の報告に対して肯定的なコメントをした時の気持ちを記述式で回答とした。

〈3 回目・4 回目〉

①開示報告会の企画（時期・時間・方法）に対して、はい・いいえ・どちらともないの 3 段階とし、準備については大丈夫・大変・どちらともないの 3 段階評価とした。②活用文献の種類、③報告を終えて自己のどの部分（人が行動する上での構成要素であると考え、感情・思考・行動・価値観・看護観の 5 項目）に影響を与えたか複数選択とした。この 5 項目は④他者の報告を聞いて自己のどの部分（人が行動する上での構成要素であると考えた、感情・思考・行動・価値観・看護観の 5 項目）に影響がありそうであるかを複数選択とした。③、④についてはその理由を記述すること、④についてはどの（誰の）報告が良かったかを提示した。

アンケートは対象者外の B 病棟看護師 3 名によるプレテストを施行し妥当性を確認した。

アンケート配布は留置法とし回収は所定の回収箱に入れるようにした。

3) 分析方法はアンケート結果を単純集計とし記述されたものは類似意見・感想をまとめた。

### 4. 倫理的配慮

本研究の主旨、協力の自由、個人が特定されないようアンケートは無記名で、データーは統計的処理をすることを説明し同意を得た。

### 5. 用語の定義

#### 1) 看護計画開示

患者に看護計画について説明し、患者と共に看護計画を立案しベッドサイドに提示する。評価も患者と共に次回の計

1) 旭川医科大学医学部附属病院

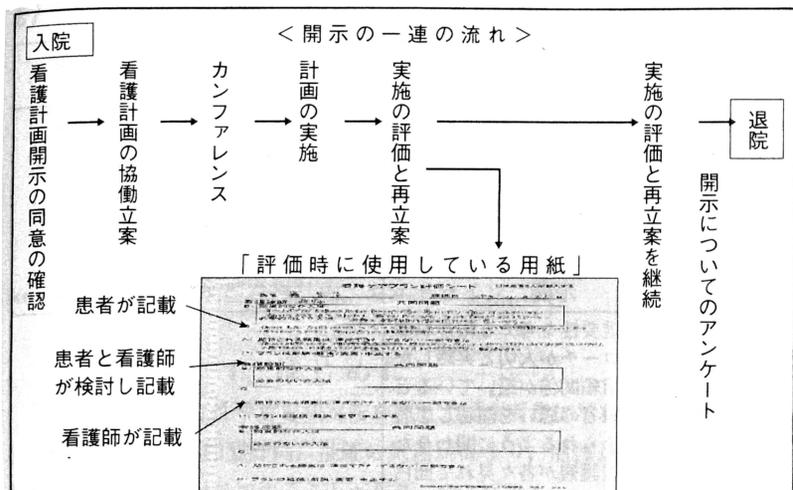


図1 看護計画開示の一連の過程

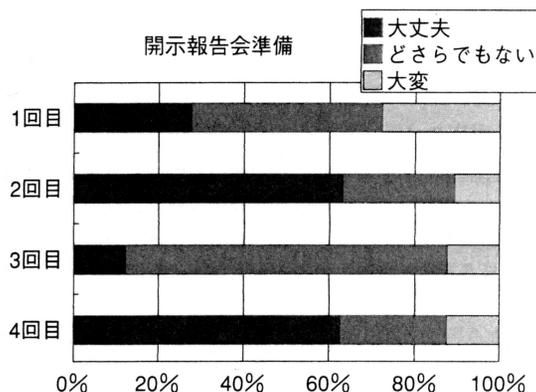


図2 看護計画開示成果報告会準備について

画へと修正などをしていく一連の過程のこと(図1)。

### Ⅲ. 結 果

第1回目テーマ「満足感」、第2回目テーマ「ステップアップもっと満足」とした。時期・報告時間・パワーポイントによる発表方法などの企画に対して全員「よかった」と回答していた。準備では、パワーポイントが「大変」と回答したのは1回目では「どちらともない」とあわせて半数以上であり「大丈夫」との回答が約30%であったが、2回目では「大変」・「どちらともない」あわせても40%以下で「大丈夫」との回答が60%以上となった。

報告しての気持ちとして、「看護することの喜びを実感した」「自分の感動を伝えられてうれしかった」などの素直な感情表現で実感をあらわしていた。他者から評価(認められる)受けての気持ちとしては「うれしかった。その気になる」「ありがたかった」で反対に他者を認めることに対しては、「ほめることはすばらしい」「ほめるのは恥ずかしい気がした」また「スタッフがよく患者さんの話を聞いているのがよくわかった」「積極的に自分も開示していこうと思った」などで、充実感を感じた表現が多く聞かれ「気持ち」に届いた会となった(表1)。

第3回目よりはステップアップに文献活用の提示をした。結果としては文献活用する上での準備が大変だったとあり、3回目の準備では「大丈夫」との回答が約10%となったが、4回目では60%以上が「大丈夫」と答えていた(図2)。

文献も有効に活用できたとしたのは4名だったが第4回では7名ができたとしていた。文献では看護論・参画理論などを活用し看護計画開示を有効なものとして根拠づけたり、患者満足の要因を裏付けたりした報告となった。

また報告を通して行動・看護観・思考に影響したと回答し他者の報告を聞いて看護観・感情・思考・行動に影響しそうであると回答があった。その理由については「日々の看護展開に

根拠性があることを改めて実感し自信になった」「好きな看護論を自分の看護観に活かして参考になった」や感想では「次回どんな看護展開があるのか楽しみのような不安のような」「協働立案に対する意欲が向上した」など多くの肯定的なコメントが述べられていた(表1)。また、どの報告者の報告が参考になったかについては、個人名が記載されその理由も述べていた。

これらの結果を集計し参加者に提示しフィードバックした。自分の報告が他者に参考としてもらえたという実感が分かるように参考になったと述べられた報告症例の看護師名はそのまま提示した。

また毎回出席していた当該看護師長も報告の都度や最後に全体的に肯定的なコメントを述べて次回への意欲の向上を図った。またゲスト参加者にもコメント依頼し都度または最後に全体としての講評なども受けることができた。

### Ⅳ. 考 察

看護計画開示の実施においては、患者と共に計画の展開を実施するうえで患者との意図的なコミュニケーションや評価においては面談の時間調整など患者により誠実な関わりが必要とされる。そのため勤務時間外での面談も日常的には実施しており精神的にも、物理的にもエネルギーが要求される。反面誠実な関わりが患者に受け入れられると、直接的に認められ開示への意欲につながっている。

尾崎は看護職の職務満足の要因のひとつに看護管理者の承認行為をあげさらにその中で「患者からの評価の上申」「成果の上申・公表」<sup>1)</sup>を因子のひとつと述べている。そこで、さらに看護計画開示の実施の継続を動機付けるために成果報告会を開始し成果を認め合う場をつくった。

この開示成果報告会の主旨は「認める・ほめる」であり、報告者は反省や課題を提示するのではなく満足した事例であること、報告後には参加者や看護管理者から準備状況・プレゼンテーション・報告事例の看護展開などについてのコメン

表1 報告後の気持ちについて

	他者からの評価（共感・容認など）を受けた報告後の気持ち	他者への評価（共感・容認など）をしての気持ち	
1回目 「満足感」	看護することの喜びを実感した。自分の感動を伝えられてうれしかった。自分の看護を振り返ってよかった。共感してもらえて安心できた。客観的に評価してもらえ自己満足に終わらずよかった。うれしい・その気になる。ありがたかった。楽しかった。面白かった	ほめることはすばらしい。ほめるのは恥ずかしい気がした。積極的に自分も開示していこうと思った。認め合う肯定的な場だったので面白かった。スタッフのがんばりや充実感を感じられて良かった。報告会に参加しているという充実感が得られた。	
2回目 「ステップアップもつと満足」	ほめられるのはうれしい。開示のため都度評価しそのときはつらいこともあったが効果的だったと評価されうれしかった。消化しきれない部分が消化されすっきりした。うれしかったし、頑張っていく意欲がわいた。視野が広がった	家族への開示の重要性を考える報告が多く家族へのアプローチが大切と実感した。患者・家族との信頼関係が築いていると感じた。今後も患者の思いを傾聴し患者の自己効力を高められるように関わりたい。スタッフの看護観が各々見れて面白かった	
	活用文献	報告を終えて自己のどの部分に影響したか	他者の報告により自己のどの部分に影響しそうか
3回目 「満足を根拠づける」 文献活用	参画理論・看護論（ベナー・トラベルビー・ヘンダーソン・キングなど）行動科学からの視点や患者満足の文献などの活用をしていた	①行動②看護観③思考の順に多かった。協働立案に対する意欲が向上した。自分の看護の根拠付けができ充実していた	①感情②看護観③思考・行動の順に多い。 スタッフの行動力のすばらしさを実感した。開示の良い点を再認識できた。理論を看護展開に活用している人の報告をきいて自分もやりたいと思った。好きな看護論を自分の看護観に活かして参考になった
4回目 「満足を根拠づける2」 文献活用	参画理論・看護論・雑誌・論文などの文献活用をしていた	①行動②感情③看護観の順に多かった。自分の行ってきたことにきちんと根拠があることを改めて実感した。自信につながった	①思考②看護観③感情の順に多い。 患者が主体的に参加していた報告を聞いて参考になった。患者との関わり方の具体例を聞けるので、実践に活かせる。傾聴することの成果の報告をきいて参考になった

トは肯定的であることとした。さらに、ゲスト参加者を設定し当該意外の看護管理者にも評価を受けることができ、看護師個人個人の感情に働きかけるものとなった。

池田は人に行動を促すポイントの1つに感情に働きかける事と述べている中で「感情とは、行動化しうるエネルギーをもちしかも意識化可能なもの」<sup>2)</sup>と表現している。

この報告会も報告者は肯定的なコメントを受けることのみならず自らも他の報告者へ肯定的意見や思いを伝えることで他者を認めることの大切さを感じる場となったと言える。

また回を重ねる毎に内容が充実してきており、3回目よりの文献活用は看護を振り返る上で客観的に表現し根拠をもって日々の看護の重要性を裏付けることになり、看護計画開示の過程にも自信がもてる有効な会と考える。さらに看護管理者としてもそれぞれ看護者の看護観も表現されその看護者が何を大切にしているかを日常とは違った一面で提示するなどそのタイムリーな場面で肯定的なコメントを伝えることができる重要な場面であると言える。それは尾崎が「部下が何を、どんな方法で実践しているかを看護管理者がよく知っていなければ、行為を認めることはできない」<sup>3)</sup>と述べてることからも開示成果報告会の意義はあると

言える。

互いの看護を認め合うこと、ほめることを主旨とした開示成果報告会は看護計画開示の継続に有効である。

## V. 結 論

看護計画開示の成果報告会は認める・ほめる場でありその事が、個人の「感情」に働きかける場となっている。この感情に働きかけることが看護への自信となり看護計画開示へのモチベーションの向上に効果があるといえる。

### 引用文献

- 1) 尾崎フサ子：看護における職務満足の要因，看護，55(13)，p. 41-42, 2003.
- 2) 池田優子：人に行動変容を促す3つのポイント，看護管理，14(3)，p. 235, 2004.
- 3) 前掲書1)，p. 43, 2003.

### 参考文献

- 1) 吉原由美子：看護師・患者間で実践する情報の共有化，月刊看護ひろく，14(1)，2004.
- 2) 守山祐子：患者参加型看護過程を目指した取り組みの実態と継続を可能としている要因，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，(29)，2004.